

文化の日

吉川英治

青空文庫

文化の日、十一月三日というと、ぼくら明治生まれのものには、降る雪も——だが菊の香も明治も遠くなりにはけり——の感が深い。だから文化の日の朝はいつも少年期への想いおもにつながらる。

けさも、茶の間のえんさきで雀を見ていた。そしてふと、このごろは東京の雀もキレイになつてきたなと思つた。なぜなら終戦後数年間は雀までが焦土によごれてウス汚かつたものである。それからやつと雀のオベベも今朝は文化の日らしく美しかつた。『平和とはこういう物と名づけたら』と私はひとりつぶやいた。そのせいか番茶のかおりもばかに美う味まい。

もちろん近年キレイになつてきたのは、あに雀のみに限らんやである。都市、服装、交通、住宅、いちおう外観はまあまああつていどにまで上昇してきた。だがまだ文化国家と誇るには文化の日を幾十秋も重ねなければ、文化万歳と呼べそうもないことは選挙演説会の会場をのぞいただけでもすぐわかる。ほんとの文化には雀の姿にあるような平和と安心がともになくはならないものだが、各党の党士の雄たけびを聞けばやたらに不安ばかりが増してくる。といつて国際間の谷間にある日本であつてみれば協和と祈りしかないのだから

ら、せめて国内喧嘩とウス汚い不精だけはやめて、都市も美しく、女性もいよいよきれいに、そして田園もその生活も小ザツパリと日本的な知恵による暮らしの仕組みを少しづつでも進めてゆくようにしたいものだ。

ところが、できることでもこのごろはやりたがらないクセがぼくらの社会にはいつてしまった。たとえば、文化の日とか元日の朝ぐらいは家々の前はキレイに掃くという習慣をやりあつてみたらどうか。全市スガスガしい朝を見るだけでもお互いの心が和むなごと思うが、休日ひの街ときたらまるで紙クスだらけが寒々している廃虚の観だ。ある休日ひの朝早く所用があつて銀座裏から商店街をあるいたとき、私はまったく都市人の不精さとよく口にする平和だの文化観などにどれほど本気なのやらと疑つた。どうやらまだ日本人は雀ほどには羽が抜けかわつていないらしい。

こんななかでうようよししながら、人間は明け暮れ幸福をさがしている。幸福とはなにか？ わかつてもないで目できがしている。じつはそれにぶつかっている人でも幸福は別にその当人へ何ら注意もしないから、風のようにさりげなく通つてしまう。幸福とはそんなもので、今が幸福であることを心で噛かみしめない者にはただの日常のことではしかないのである。そして多くは、不幸だけをいやというほどかみしめて一生までも忘れない。自分

ほど不幸なものはないと思っている。

なぜ今の境界のうちに幸福を見つけないだろうか。見つけられだれの足元にも貝殻がある、海の底の物ではない。海の真珠を望むもいいが、それなら真珠膜をそれに巻かせる種子の用意と多年にわたるたんせいがある。今日の幸福をかみしめるには今日あるものでなければならぬ。それは至極坦々^{たんたん}たる日常生活のうちのものである。たとえばきょうの文化の日を茶の間で家族して笑いさざめけるなどは幸福の一つだろう。行楽、観劇、友の会、留守番に回された独りの人にも、じつは幸福がこぼれている。その人の心の手のひらがそれを持つか持たないかだけのはなしである。幸福とはじつにそんな平凡で無味に似たものだ。刺激だけを幸福だとする考え方は炎の火花だけを火と思うようなものである。人間生活の中の火はもつとあたたかです。そして朝夕に生かされている手近なものであるはずだ。

だが文学作品の中では幸福の幻影をこんな単純にはしていない。作中の人間像がそれぞれ特殊な境遇や性格を持つからである。したがってそれらの主人公が対象とする幸福にはむずかしい幸福の核分子が実験され、「幸福とは何か」の問題を読者に提供しているわけだ。そういう科学的思惟を幸福というものにそそいでみるのも、人生を深く観ることでは

いいことにちがいない。けれどそのことが直ちに現実の自分の幸福を充たすことであるかのように思ったら大きな誤算を生むであろう。

そう見てくると、日本自体のあり方からして、ほんとに文化の目らしい環境にあるか無いかも考えさせられてくる。その点で私はつねにこの都市文化と地方文化とのひどく偏つた隔差が心に納得いかないで仕方がない。どうして日本はややもすれば畸形な跛行文化に走るのでろう。

都心、たとえば東京に例をとると、東京から自動車で三十分、あるいは四十分も外へ出ると、もうその地方村落や小さい町には、東京のネオンの海とは余りにも谷底を隔てたように落差があつて、今日の文化には恵まれないものがたくさんある。都心の下層部もまたそうだが、もう都会中心の爛熟らんじゆくは、このへんでたくさんだとさえ思いたくなる。これ以上はまあ道路でもよくすればだ。消費文化の面はそろそろおいて、あとは地方文化の未開拓面に国力やお互いの総意をそぐべきではなからうか。旅行して地方の田野や山間の余りに今日から遠い人々の生活にふれるたびにいつもそれを痛感する。そして草ぶき屋根や荒ら壁の部落でその人々の生活とはまったく似もつかないジャズや歌謡曲の流れなどを聞くと、不調和な滑けい感を覚える以前に、何かこの国の文化なるものの在り方がか

なしくなる。私が地方人なら腹が立ってたまらないだろう。

いやそんな問題にふれたらキリがないほどある。とにかく都市と地方との跛行文化は畸形だし病的文化だ。終戦後、長足な復興と見える復興も、じつはまだまだ健全な文化の発展とはいえないのだろう。都市偏重の、それも恐ろしく早いテンポで爛熟して来たこの末期相文化は社会史的にみても危険でさえある。政治はもとより、われわれ文化人も働きかけて、もつと広い全土にお互いに文化を作用し合って幸福を分け合う、それがきょうの文化の日に思うことである。

(昭和三十五年)

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・47 草思堂随筆」講談社

1970（昭和45）年6月20日第1刷

入力：川山隆

校正：門田裕志

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文化の日

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>